

# 「沖縄の建設技術」

社団法人沖縄県建設産業団体連合会

会長 國場幸一郎

終戦直後の日本の建設業界は、敗戦により灰塵の中から立ち上ってまもなくであり、日本政府の貧困な財政で公共投資も少なく脆弱な状態であった。

一方、沖縄は昭和26年の本格的な基地建設が始まり、沖縄の建設業は無論、米国大手の建設会社や、日本の大小建設会社を始めとして、台湾、比国等より、多数の建設会社が参加し、まるで各国の建設技術の競争という光景を出現するに至った。

当然の如くそこには、米軍から提供される米国の最新の建設機械や技術が投入され、更には建物そのものも当時としては先端の装備の構築物を要求された。

昭和35年頃出版された岩波新書の「日本の建設業」の中に「戦後日本の建設業は、沖縄より始まった」と書いてある様に遅れた日本の建設技術は沖縄の工事に参加する機会を得て、ブルドーザー、ダンプトラック、クレーン等の大型機械を駆使しての建設を経験したり、更には建物内部の近代化された設備技術に驚きをもちながら学習したり吸収したに違いない。

特に当時世界的に有名な建築家であったスキッドモアの設計した北谷の海軍病院は、その規模、内容に於いて東洋一と云われ、その工事の内容は建物の構造もさる事ながら、その設備に於いては世界の先端を行くものであり、これを沖縄の技術者が挑戦し完工した事は特記に値するものである。更にその中から日本の技術界に転移したものが多数あるのは我々の自慢でもある。

例えば、大型のキャリアーの冷房装置や、それに伴う計装工事配管等であり、建築物と云えば日本のアルミサッシ等はそのから始まる。

建設業が修得したのは技術ばかりではない米軍契約事務所との折衝を通じて、契約事務処理の方法やジョイントベンチャー方式とかコンストラクションマネージメントと云った新しいソフトも多く、今日の日本業界の先取りに相当するものもあった。

この様に沖縄の建設業界は云うに及ぼず、設備業界も過去に燦然たる技術歴史を数える事が出来るのであるから21世紀に向かって新たなる努力の一步を踏み出して欲しいとエールを送る一人である。



一般社団法人 沖縄県設備設計事務所協会